

ヤマセ地帯に適用する養蚕技術体系

(養一試、一戸分場・栽桑部・養蚕経営部)

1. 背景とわらい

県北部沿岸地域は、養蚕の大規模農家および新規農家が増加して熟生産が伸び、養蚕の新産地形成が進んでいる。しかしこの地域はヤマセ地帯特有な気象の影響を受け、桑葉の生産が不安定で養蚕経営に支障を来している。このためヤマセ地帯に適應する耐冷性桑品種の検討と共に安定的な桑栽培技術の改善を図り、また現地の実態に合せた多回育養蚕の養期調整を総合的に検討して、ヤマセ地帯に適用する養蚕技術体系を組立てたので紹介する。

2. 技術の内容

- 〔栽桑〕 (1) 適応する桑品種----県北部沿岸地帯では現在改良亂返が95%植栽されているが、縮葉細菌病、胸枯病等の被害により生産性が低いので、耐病、耐冷性の「しんけんもち」を選定し、80cm以上の植帯地帯では「ゆきしのみ」を選定する。
- (2) 肥培管理----秋期に安定した好気象条件となるので、巻肥と夏肥の分施割合は、内陸部の7:3より夏肥の割合を多くして6:4とする。有機物は厩条糞沙、畜産排世物を活用すると共に、冬期の桑園間作に麦類の栽培により園内自給を図る。麦類の間作は偏西風による土壌の風食防止にも役立つ。
- (3) 桑の収穫法----ヤマセ地帯の桑生育特性から8月以降の桑収量が多いので、計画的安定生産をわらいに、二巻一夏輪収法と株上げ株下げ輪収法の組合せとする。なお株上株下輪収法を密植桑園に置換出来る。
- (4) 栽植密度と仕立法----10a当たり800本を目安とし、株の高さを50~60cmの中刈仕立とする。
- (5) 桑生垣の設置----偏西風またはヤマセ風の強い地帯では南北畦とし、15~20m間隔で桑生垣を設置して、土壌の風食あるいはヤマセによる被害の軽減をはかる。
- 〔育蚕〕 (1) 養期の設定----現状の掛立回数は6~7回が多く、養期の重複が通常化して養作の不安定を招いているので、年5回育とし、後半に好気象条件に恵まれることから、晩秋期に重点を置いて、掛立月日は6月5日(17%) 7月1日(17%) 7月30日(23%) 8月17日(23%) 9月10日(20%)を目安とする。
- (2) 飼育上棟施設----施設の保有状況は1棟農家が多く(78%)上棟室兼用が多いので、飼育舎はアルミハウスを導入して自給飼料房とし、上棟室は専用で温風暖房とする。なお養舎の設置場所は、ヤマセ風の侵入経路を避け、あるいは生垣等を設置する。
- (3) 飼育上棟法----1~3令共同飼育、4~5令1日2回桑葉育、桑払い自然上棟とする。

3. 指導上の留意事項

- (1) この技術体系は、昭和57年から3カ年現地において実施した、ヤマセ地帯における桑の安定栽培技術試験、調査成績を基に、ヤマセ地帯に適用する標準的な技術として組立てたものであるが、指導に当たっては各農家の経営条件を考慮しながら活用する。
- (2) 桑品種の更新は、しんけんもちの古桑さし木による桑苗生産が容易に出来るので、積極的に自給生産を図る。
- (3) 除草剤の有効利用による灌漑管理または畦間ポリマルチ等により地温上昇を図る。
- (4) 採葉量を減らす農家にはコンブ、ウニの開口日に備え1日1回給桑の技術を導入する。

4. 参 考 文 献 ・ 資 料

岩手県農政部 (1984) 養蚕の新技术と経営

5. 試 験 成 績

ヤマセ気象の著しい現地2カ所に試験圃場を設定し、桑品種の生育特性並に桑の安定栽培技術、多回育養蚕の養期調整等を検討し次の結果を得た。

1) 耐冷性桑品種の選定

ヤマセ地帯における桑品種の生育特性は、1俣長良な品種：しんいちのせ・しんけんもち、

- ②耐冷性：しんけんもち・ゆきしのぎ ③多収性：しんけんもち・ゆきしのぎ・剣持 ④良葉質：しんいちのせ・しんけんもち ⑤直立性：あおばねずみ・改良糸返 ⑥病害抵抗性：耐縮葉細菌病…剣持・しんけんもち，耐裏うどんこ病…しんいちのせ・しんけんもち，耐胸枯病…ゆきしのぎ・しんけんもちであった。

この結果からヤマセ地帯の桑品種として、しんけんもち・ゆきしのぎが適応品種と思われる。

2) 桑の耐冷性の仕立法と収穫法の確立

(1) 桑栽培改善技術の組立：桑園肥培管理の実態調査では、施肥量と有機物の施用が少く生産性が低かった。施肥時期は春肥60%、夏肥40%の施用割合が良く、仕立法は中刈が多収。収穫法はヤマセ地帯の多回育に対応した二巻一戻、株上株下輪収法を確立した。

(2) 桑による防風・風食軽減効果：桑生垣は剣持の古糸さし木で簡易に造成でき、風下の桑の生育は良好で縮葉細菌病が減少した。また土壌の風食防止効果は生垣の風下10m地点でも風食土が30%少なかった。

(3) 桑病害発生要因の解析と防除：ヤマセ地帯では縮葉細菌病が多病し、海岸に近いほど激発傾向がみられた。剣持・しんけんもちは発生が少なく、またストマイ剤の効果が認められた。

(4) 多回育養蚕の養期調整と技術体系の組立：育蚕技術の実態調査では養蚕が少なく、少量多回育で箱収が少なかった。ヤマセ地帯の桑葉質は内陸に比べ、春養期は劣るが晩秋養期は勝る特異性がみられた。

以上の結果を総合してヤマセ地帯に適合する養蚕技術体系を組立てた。

主 要 成 果 の 具 体 的 デ ー タ

ヤマセ地帯の養蚕技術体系(養期別桑收穫体系と飼育計画 桑面積 100アール)

桑園型式		養期	I (6/5)	II (7/1)	III (8/17)	V (8/17)	IV (9/10)	計
用 途 別 桑 園 ・ 収 穫 法 ・ 収 穫 量	音 通 桑 園	A 夏切	2,700 kg 基部伐採	—	—	—	2,000 kg 基部30cm残し	4,700 kg (次年度 B)
		B 春切	—	—	2,600 kg 基部20cm残し	—	—	2,600 kg (" C)
		C 株下 春切	—	500 kg 小枝向引収穫	—	2,520 kg 基部100cm残し	—	3,020 kg (" A)
		D 株上 春切	460 kg 出開き芽摘芽 収穫	1,500 kg 新梢基部10cm 残し	—	—	1,360 kg 再発枝基部 2~3芽残し	3,320 kg (" B)
		E 株下 春切	—	500 kg 小枝向引収穫	1,040 kg 条数1/2 50cm 残し片側	1,400 kg 残枝50cm残し	—	2,940 kg (" D)
飼 育 計 画	稀立蚕(箱)		5.0 (16.7)	5.0 (16.7)	7.0 (23.3)	7.0 (23.3)	6.0 (20.0)	30.0 (100)
	收穫量(kg)		170	155	231	238	186	980